

つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業づくり (3年次)

～子どもが友だちの表現に「価値」を見出すことができるようにするための教師の働きかけを通して～

国語科における「つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業」について

国語科における「つながり、知的な深まりを楽しむ子どもが育つ授業」とは、子どもが、友だちの活動や表現を見て、メタ認知能力を高めていくことのできる授業だと考える。そして、子どもが学習の目的・方法が分かって、よりよいものにしようとしている姿を「つながり、知的な深まりを楽しむ子どもの姿」と捉える。「もっと読みたい」「調べたい」「劇で表現してみたい」等の「こうなりたい」という気持ちが増えることである。そのためには、表現するのは当たり前であるという環境を整えておく必要がある。学習したことをアウトプットすることを前提として学んでいく中で、自分自身の変化を実感しながら、次はもっとこうしたいという思いをもつ子どもが育つ授業である。新しい学びと出会うワクワクドキドキ感を大切に、既習を活用させたり友だちを参考にさせたりしながらねらいへと向かわせる学習を展開したい。

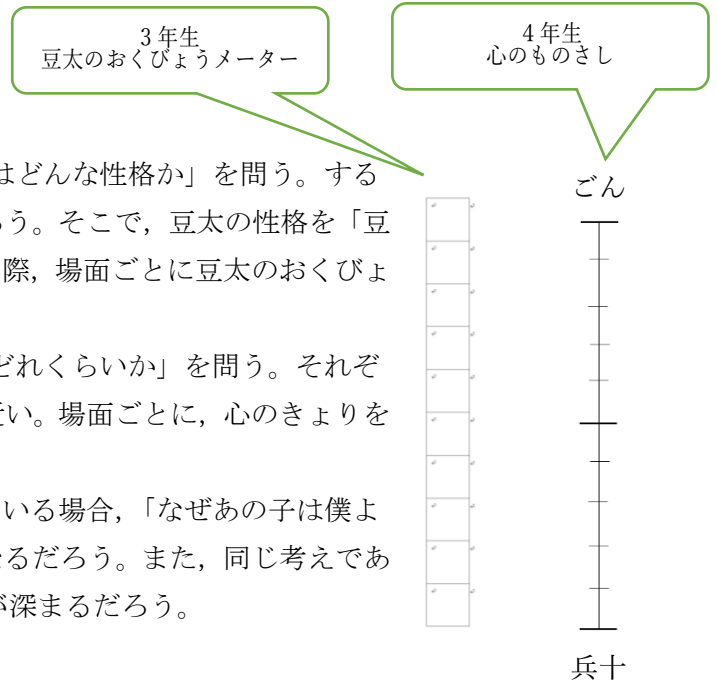
1. 子どもを「共通の土台」にのせるための働きかけ

○スケーリングで立場を決めさせる

3年生には単元の初めに、「物語の中心人物である豆太はどんな性格か」を問う。すると子どもからは「おくびょう」という意見が出てくるだろう。そこで、豆太の性格を「豆太のおくびょうメーター」で可視化して表現させる。その際、場面ごとに豆太のおくびょう度合いを何%かでつけさせる。

4年生には単元の初めに、「ごんと兵十の心のきよりはどれくらいか」を問う。それぞれの位置が目盛りの中央に近い方が、より心のきよりが近い。場面ごとに、心のきよりを可視化して表現させる。

3年生も4年生も、自分と友だちの考えにズレが生じている場合、「なぜあの子は僕よりも高いのかな？」など、関わり合いを生むきっかけになるだろう。また、同じ考えであっても、自分には無い考えや理由に触れることで、学びが深まるだろう。



○単元を貫く発問

3年生には単元の初めに、「物語の中心人物である豆太はどんな性格か」を問い、毎時間、豆太の性格を「おくびょうメーター」に示させる。学習の最後には、「物語全体を通して、豆太はどんな性格か」をカードに表現させる。

4年生には単元の初めに、「ごんと兵十の心のきよりはどれくらいか」を問い、毎時間、ごんと兵十の心のきよりを「心のものさし」に示させる。学習の最後には、「物語の初めと終わりで、ごんと兵十の心のきよりはどのように変化したか」をカードに表現させる。

3年生も4年生も、単元を通して同じ流れと同じ発問を繰り返して学びを進めていくことで、子どもが学ぶ内容と学ぶ手法の両方を分かって学習に取り組めるようにする。

2. 子どもが友だちの表現に「価値」を見出すことができるようにするための働きかけ

○ふり返りをフィードバックする

授業の最後にふり返りを書かせる際、①自分の考えが変わったこと②学びが深まったこと③新しい視点が増えたことなどの観点で書かせる。「〇〇さんの意見に納得しました」など、友だちと交流することで考えが深まったり変わったりした子どものふり返りをフィードバックすることで、友だちの考えに目を向けさせるきっかけとする。

○1対1で意見を伝え合う場を設定する

友だちの表現に価値を見出すために、まずは1人ひとりが友だちの意見にしっかり向き合って話を聞くことが必要であると考え。そこで、授業の中で子どもが1対1で友だちと意見を伝え合う場を設定する。こうすることで、自分と友だち、友だちと友だち、など、自然と意見を比べるきっかけとなると考える。

○根拠を問う

子どもが意見を述べた際、「どこからそう思った?」「どこに書いている?」など、本文から根拠を探させる問い返しをし、「ここにこう書いてあるから、こうだと思う」などと表現させる。こうすることにより、子どもの中で、理由を確かにしたり、増やしたりすることができるように考える。

○学びの足跡を残す

毎時間表現させたことを、授業記録として残していくことで、その時間に扱っている場面だけではなく、物語全体を通して登場人物の心情を考えられるようにする。例えば4年生の場合は、ごんの兵十への思いが、物語が進むにつれて変わっていくことを捉えさせる。そうすることで、子どもが自分の変化を自覚するきっかけとなるだろう。

【3年生】

1. 単元名

モチモチの木

「人物のせいかくを想像して、伝え合おう」

(東京書籍3下)

【4年生】

1. 単元名

ごんぎつね

「人物どうしの関わりを考えて、伝え合おう」

(東京書籍4下)

2. 指導観

〈3年〉

本単元の重点指導事項は、学習指導要領C(1)オ「文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと」(精査・解釈)である。その際、(1)エ「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること」を生かした読みの展開を意図している。

本学習材「モチモチの木」は、中心人物である豆太の成長が描かれている。豆太の子どものらしい感覚や行動がいきいきと描かれており、豊かに想像を広げながら共感的に読み取ることができる作品である。場面の変化も明確であり、中心人物の心情の変化をとらえやすい構成となっている。場面の移り変わりと結び付け、登場人物の人物像を想像する学習に適した教材である。

子どもたちは、文学的文章を読むことについて、前の単元で「サーカスのライオン」を取り扱い、物語全体を通して、気持ちやその変化が詳しく書かれている中心人物を見つけ、その人物がどのような人物かを想像する学習を行っている。その際、教材文を丁寧に読み、言葉から想像を広げることが十分とは言えなかった。

本学級の子どもたちは、複式学級で学習することに慣れてきているが、発言が特定の子どもに偏ってしまうことがある。全員が物語の世界に浸りながら、楽しんで学びに向かってほしい。

第一次では、まず物語を読み「豆太ってどんな性格？」と問う。すると「おくびょう」という言葉が出てくることが予想される。そこで、どれくらいおくびょうかを「豆太のおくびょうメーター」で示していき、学習の最後には「豆太ってこんな人！カード」を作り友だちに紹介するという見通しをもたせる。

第二次では、まず物語を場面ごとに読み、豆太のおくびょう度合いとその根拠を示させる。メーターという可視化のツールを使うことで、自分と友だちの考えに生じたズレから、その根拠を交流させる。その際、本文の言葉を手掛かりにして想像したことを、丁寧に表現させる。また、臆病でない部分はどのような性格であるのかも、根拠を持って示させることで、おくびょうだけでなく勇気ややさしさ、じさまへの愛情といった豆太の複雑で人間らしい性格に気づかせる。友だちと意見を交流することで、自分の考えが変わったり深まったりしたことを、しっかりとふり返りで書かせる。次に、これまで読んできたことから、豆太がどのような性格であるか、自分の考えをカードにまとめ、交流する。

第三次では、これまでの学習をふり返り、物語の読み方で新しく分かったことを共有する。

本時は、第7時間目である。5場面の豆太の性格を読み取り、「おくびょうメーター」に表す時間である。まず、5場面を音読し、豆太の性格を表している文に線を引かせる。その際、豆太は臆病であることの根拠となる文には赤で、それ以外の性格の根拠となる文には青で線を引かせることで、豆太の性格を多様に捉えることができるようにする。次に、根拠をノートに書かせ、豆太のおくびょう度合いをメーターに表現させる。その際、「こう書いているから、自分はこう思う」と、教科書の言葉をそのまま引用させるのではなく、読み取ったことから考えたことを自分なりの言葉で表現させる。それから、1対1で共有させる。そして、全員で考えを共有する。その際、最初に表現した時と、メーターのパーセンテージや根拠が変わっていることも認め、変わった理由を述べさせる。また、これまで読んできた物語の内容から、子どもは5場面の豆太にも「おくびょう」以外の性格があることが予想される。そこで、子どもが表現したメーターに対して「豆太の性格は、いつでもこのメーターの通りなのかな」と揺さぶる。そうすることで、いざというとき(豆太にとって大切なじさまに危険が迫っているときなど)には、臆病ではない性格が湧き上がることがあることを捉えさせる。最後に、学習のまとめを

して、授業を終える。

〈4年〉

本単元の重点指導事項は、学習指導要領C(1)オ「文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと」(精査・解釈)である。そのため、(1)エ「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像すること」を生かした読みの展開を意図している。

本学習材「ごんぎつね」は、中心人物であるごんと兵十の関係の変容を描いた物語である。ごんの兵十に対する気持ちの変化は、それぞれの場面のごんの行動や心内語などに注目させて読み取らせたい。一方、兵十については、六場面でのごんに対する気持ちの変化を読み取ることが重要であるが、ごんと直接関わる一場面や、ごんの行為だとは知らずにそれについて話している四場面とも関連付けながら考えさせたい。

子どもたちは、文学的文章を読むことについて、前年度に「モチモチの木」を取り扱い、物語で描かれる中心人物の性格に注目したが、本単元では、中心人物だけでなく、中心人物と深くかかわる人物の心情にも目を向けさせ、さまざまな解釈が可能な結末部分について考えさせる。

本学級の子どもたちは、課題に向かい、1人ひとりがしっかりと考えをもったり言ったりすることができる。また、物語の言葉を丁寧に読み取り、人物像を想像することが得意な子どもも多い。そのため、「ごんぎつね」という物語の世界に浸りながら、楽しんで学びに向かうことができると考える。

第一次では、まず物語全体を読み、中心人物であるごんと、それに深くかかわる兵十という主な登場人物2人について捉える。そこで、「ごんと兵十の心のきよりはどれくらいだと思う」と問いかける。すると「場面によって違う」という発言が出てくるのが予想されるため、場面ごとのごんと兵十の心のきよりを読み取り、学習の最後に「ごんと兵十の心のきよりカード」を作るという見通しを立てる。

第二次では、まず物語を場面ごとに読み、ごんと兵十の心のきよりを「心のものさし」に示させる。ものさしという可視化のツールを使うことで、自分と友だちの考えに生じたズレから、その根拠を交流させる。その際、本文の言葉を手掛かりにして想像したことを、丁寧に表現させる。友だちと意見を交流することで、自分の考えが変わったり深まったりしたことを、しっかりとふり返りで書かせる。次に、これまで読んできたことから、ごんと兵十の関係が一場面から六場面まででどれほど変わったか、自分の考えをカードにまとめ、交流する。

第三次では、これまでの学習をふり返り、物語の読み方で新しく分かったことを共有する。

本時は、8時間目の時間である。6場面のごんと兵十の心の距離を「心のものさし」に表す時間である。まず、6場面を音読し、ごんと兵十の心の距離を表す文に線を引かせる。その際、ごんの兵十への気持ちが分かる文には赤色で、兵十のごんへの気持ちが分かる文には青色で線を引かせることで、それぞれの心情を分けて捉えやすくする。次に、根拠をノートに書かせ、「心のものさし」にごんと兵十の心の距離を表現させる。その際、「こう書いているから、自分はこう思う」と、教科書の言葉をそのまま引用させるのではなく、読み取ったことから考えたことを自分なりの言葉で表現させる。それから、1対1で共有させる。そして、全員で考えを共有する。その際、最初に表現した時と、「心のものさし」の位置や根拠が変わっていることも認め、変わった理由を述べさせる。この時、これまでの学習と比べて、子どもの「心のものさし」では兵十の位置が大きく変わることが予想される。そこで、償いをし続けてくれたごんに対する兵十の気持ちと気付いてもらえたごんの気持ちとを、言葉や音読、動作化で表現させる。そうすることで、兵十の後悔や驚きと、ごんの喜びなど、複雑な心情を捉えさせる。最後に、学習のまとめをして授業を終える。

3. 3年の単元の目標

- (1)様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)オ
- (2)登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、具体的に想像することができる。
〔思考力、判断力、表現力〕C(1)エ
- (3)文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。〔思考力、判断力、表現力〕C(1)オ
- (4)文章から登場人物の様子や行動などを示す語句を粘り強く探し、友だちの考えを積極的に聞いて自分の考えをもったり広げたりしながら、学習しようとしている。
〔学びに向かう力、人間性等〕

4. 3年の単元で取り上げる言語活動

豆太の性格を読み取り、「豆太のおくびょうメーター」に臆病度を示す。(C(1)オ)

5. 4年の単元の目標

- (1)様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)オ
- (2)登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。〔思考力，判断力，表現力〕C(1)エ
- (3)文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもつことができる。〔思考力，判断力，表現力〕C(1)オ
- (4)文章から登場人物の様子や行動などを示す語句を粘り強く探し，友だちの考えを積極的に聞いて自分の考えをもったり広げたりしながら，学習しようとしている。〔学びに向かう力，人間性等〕

6. 4年の単元で取り上げる言語活動

ごんと兵十の関係を読み取り、「ごんと兵十の心のものさし」に心の距離を示す。(C(1)オ)

7. 3年の単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に取り組む態度
①様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，語彙を豊かにしている。(1)オ	①「読むこと」において，登場人物の気持ちの変化や性格，情景について，具体的に想像している。(C(1)エ) ②「読むこと」において，文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもっている。(C(1)オ)	①文章から登場人物の様子や行動などを示す語句を粘り強く探し，友だちの考えを積極的に聞いて自分の考えをもったり広げたりしながら，学習しようとしている。

8. 3年の単元と評価の計画（全9時間）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1	○「モチモチの木」を読み，「豆太ってこんな人！」カードを作るとい見通しを立てる。	・「豆太ってどんな性格？」と問い，「おくびょうメーター」で豆太の性格を表していくことを共有する。 ・辞書等を用いて，分からない言葉の意味を調べさせる。	〔知識・技能①〕 ノートへの記述・発言 ・言葉の意味を考えながら読んでいくかの確認

2 3 4 5 6 7 8 (本時)	○時・場所・人物と、場面ごとのあらすじを確認する。	・場面ごとのあらすじを、1文でまとめさせ、物語の大まかな内容を把握できるようにする。	[思考・判断・表現①] ノートへの記述・発言・板書 ・叙述を元に豆太の性格を想像しているかの確認
	○場面ごとの豆太の性格を「おくびょうメーター」に表し、根拠を話す。	・「どこからそう思った?」「どこに書いている?」と問い返すことで、本文から、根拠となる叙述を探させる。 ・「臆病じゃない部分は、どういう性格なの?」「いつも臆病なの?」等と問うことで、臆病だけではない、豆太の性格の奥行きに気付かせていく。 ・友だちと考えを交流させることで、自分には無い考えや根拠を増やし、学びを深めさせる。 ・1時間ごとの学習の足跡を残し、ふり返ることができるようにしておくことで、他の場面との繋がりを意識した学びを展開できるようにする。	[思考・判断・表現②] ノート・カード・発言・板書 ・これまでに学んだことを使って、自分の考えを話したりカードを書いたりしているかの確認
	○「豆太ってこんな人!カード」を書き、交流する。	・これまで学んだことを使って、物語全体を通した豆太の性格とその根拠をカードにまとめさせる。	[主体的に学習に取り組む態度①] ノート・発言 ・進んで友だちと関わりながら、カードを書いたり話したりしているかの確認
9	○学習のまとめをする。	・「モチモチの木」を通して、分かったことや、物語を読む際にこれから気を付けたいことを共有する。	[思考・判断・表現②] 発言・板書 ・「モチモチの木」を読んで考えたことを、書いたり話したりしているかの確認

9. 4年の単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に取り組む態度
①様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにしている。(1)オ)	①「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。(C(1)エ) ②「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。(C(1)オ)	①文章から登場人物の様子や行動などを示す語句を粘り強く探し、友だちの考えを積極的に聞いて自分の考えをもったり広げたりしながら、学習しようとしている。

10. 4年の単元の指導と評価の計画 (全10時間)

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1	○「ごんぎつね」を読み、「ごんと兵十の心のきょうりカード」を作るとい見通しを立てる。	・「ごんと兵十の心の距離はどれくらい?」と問い、「心のものさし」で表していくことを共有する。 ・辞書等を用いて、分からない言葉の意味を調べさせる。	[知識・技能①] ノートへの記述・発言 ・言葉の意味を考えながら読んでいるかの確認

<p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8 (本時)</p> <p>9</p>	<p>○時・場所・人物と、場面ごとのあらすじを確認する。</p> <p>○場面ごとの「ごんと兵十の心のきより」を「心のものさし」に示し、根拠を話す。</p> <p>○「ごんと兵十の心のきよりカード」を書き、交流する。</p>	<p>・場面ごとのあらすじを、1文でまとめさせ、物語の大まかな内容を把握できるようにする。</p> <p>・「どこからそう思った?」「どこに書いている?」と問い返すことで、本文から、根拠となる叙述を探させる。</p> <p>・「ごんに対して兵十は?」と問うことで、六場面までは兵十のごんに対する気持ちが変わっていないことを捉えさせる。</p> <p>・友だちと考えを交流させることで、自分には無い考えや根拠を増やし、学びを深めさせる。</p> <p>・1時間ごとの学習の足跡を残し、ふり返ることができるようにしておくことで、他の場面との繋がりを意識した学びを展開できるようにする。</p> <p>・これまで学んだことを使って、物語全体を通した「ごんと兵十の心のきより」とその根拠をカードにまとめさせる。</p>	<p>[思考・判断・表現①] ノートへの記述・発言・板書 ・叙述を元にごんと兵十の心のきよりを想像しているかの確認</p> <p>[思考・判断・表現②] ノート・カード・発言・板書 ・これまでに学んだことを使って、自分の考えを話したりカードを書いたりしているかの確認</p> <p>[主体的に学習に取り組む態度①] ノート・カード・発言 ・進んで友だちと関わりながら、カードを書いたり話したりしているかの確認</p>
<p>10</p>	<p>○学習のまとめをする。</p>	<p>・「ごんぎつね」を通して、分かったことや、物語を読む際にこれから気を付けたいことを共有する。</p>	<p>[思考・判断・表現②] ノート・カード・発言・板書 ・「ごんぎつね」を読んで考えたことを、書いたり話したりしているかの確認</p>

11. 本時の指導 (3年生: 7/9 時間目 4年生 8/10 時間目)

(1)3 年の本時の目標

○「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。(C(1)オ)

(2)3 年の本時の評価規準

「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。

(3)4 年の本時の目標

○「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、登場人物の変化について、感想や考えをもつことができる。(C(1)オ)

(4)4 年の本時の評価規準

「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、登場人物の変化について、感想や考えをもっている。

○教師の働きかけ □評価規準	学習活動（3年生） ・予想される子どもの反応	学習活動（4年生） ・予想される子どもの反応	○教師の働きかけ □評価規準
<p>○臆病に関する叙述とそれ以外の性格に関する叙述を色分けさせることで、豆太の性格を多様に捉えられるようにする。</p> <p>○スケーリングで立場を決めさせることで、考えを可視化し、友だちやこれまでの自分の考えとのズレに気付かせる。</p> <p>○叙述だけでなく、そこから自分がどう考えたかも表現させることで多様な気付きを促す。</p> <p>○1対1で表現させることで、相手の考えに耳を傾けさせ、自分や友だちの考えと比較するきっかけとする。</p> <p>思「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。 (ノート・発言・板書)</p> <p>○考えの変容を認め、その根拠を述べさせることで、価値を感じた友だちの表現を広げさせる。</p> <p>○「豆太の性格は、いつでもこのメーターの通りなのかな」と揺さぶることで、臆病だけではなく多面的に豆太を捉えることができるようになる。</p>	<p>1. 課題をつかむ ○5場面を音読する。</p> <p>5場面の豆太はどんなせいかわかな。</p> <p>2. 課題を解決する</p> <p>○豆太の性格が分かる叙述に線を引き、根拠をノートに書く。</p> <p>○「豆太のおくびょうメーター」に色を塗り、考えたことを友だちに伝える。</p> <p>・「勇気のある子どもだったんだから」：豆太はおくびょうだけれど、勇気を出せる子だと思ってるから、臆病度は60%くらいです。</p> <p>・「それでも豆太は…」：4場面ではじさまを助けるために勇気が出たけれど、また元の臆病者に戻ってしまったから、5場面では100%だと思います。</p> <p>○全体で考えを共有する。</p> <p>・5場面の豆太は、また100%臆病に戻ってしまったと思ったけれど、○○さんが「臆病だけど、やさしさがあるから勇気も出せる」と言っていて、豆太の性格は臆病70%、優しさや勇気で30%くらいという考えに変わりました。</p> <p>・豆太は、基本的には臆病だけど、実はそのほかに優しさや勇気も入っていて、大切なじさまに何か起きた時に、その優しさと勇気を出すことができるのだと思う。</p> <p>3. 学習をふり返る</p> <p>○本時で考えが変わったことやその要因になったことをふり返る。</p>	<p>1. 課題をつかむ</p> <p>6場面のごんと兵十の心のきよりはどれくらいかな。</p> <p>○6場面を音読する。</p> <p>2. 課題を解決する</p> <p>○ごんと兵十の心の距離が分かる叙述に線を引き、根拠をノートに書く。</p> <p>○「心のものさし」に表現し、考えたことを友だちに伝える。</p> <p>・「ごんぎつねめ」：兵十は、6場面の最初はまだごんが憎いと思います。</p> <p>・「火縄じゅうをばたりと取り落とししました」：ごんが贈り物をし続けてくれたことに気づいて、撃つたことを後悔しているから、4.5くらいまで近づいたと思います。</p> <p>○全体で考えを共有する。</p> <p>・私は、兵十はしばらく考えた後でごんの償いに気付いたと思ったけれど、○○さんが「まだ、つつ口から…」があるから、撃つてすぐ気づいたと言っていて、なるほどと思いました。兵十は、もっとよく見たら撃たなくて済んだのにと後悔したと思います。だから、今までで一番ごんに寄り添っているのが、5です。</p> <p>・「ごん、おまえだったのか…」のところは、いたずらぎつねだと思っていたごんがくりをくれていたことを知って驚いたのと、撃ってしまった後悔があると思う。ごんは撃たれてしまったけれど、兵十に気付いてもらえたから幸せになって5になったと思う。</p> <p>3. 学習をふり返る</p> <p>○本時で考えが変わったことやその要因になったことをふり返る。</p>	<p>○ごんの叙述と兵十の叙述を色分けさせることで、それぞれの心情を分けて捉えられるようにする。</p> <p>○スケーリングで立場を決めさせることで、考えを可視化し、友だちやこれまでの自分の考えとのズレに気付かせる。</p> <p>○叙述の引用だけでなく、自分の考えも表現させることで多様な気付きを促す。</p> <p>○1対1で表現させることで、相手の考えに耳を傾けさせ、自分や友だちの考えと比較するきっかけとする。</p> <p>思「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、登場人物の変化について、感想や考えをもっている。 (ノート・発言・板書)</p> <p>○考えの変容を認め、その根拠を述べさせることで、価値を感じた友だちの表現を広げさせる。</p> <p>○ごんと兵十のやりとりを、言葉や音読、動作化などで表現させることで、これまでの場面と関連した2人の複雑な心情を捉えさせる。 (ノート・発言・板書)</p>